

# 利用体験記

名前(PN可) M.Y.

Eukaré まちたより 東京大学理系二类に合格した M.Y. です。  
この度、利用体験記を書かせて頂くことになり大変うれしく思います。主に私の大学受験体験を中心に自習室利用体験などについて書いていきますが、何か皆さまの参考になるところがあれば幸いです。

まず初めに、私が Eukaré まちた を利用することになったまでの経緯を簡単に説明したいと思はれます。私は中高一貫の進学校に在籍しており、五年間ずと成績は見るも無残な劣等生でした。高三の春にやがと奮起して受験勉強を始めますが、五年間怠けていた負債は到底一年で返しきれず、当然のように浪人が決定。一浪目は有名予備校に在籍し、何の意図もなく授業を聞く日々を過ごしました。当時は予備校に通っている間は「何とか合格しよう」という甘い考えもあったのですが、成績は平行状態のまま二度目の本番を迎え、二度目の敗北を告げられました。私は泣きながら二浪を受け入れました。しかしここで問題になったのは、これは二浪はどのようにして過ごすのかということでした。私はだだだど過ごしていた現役一浪をふりかえり、自分の可能性を本気で試してみたい衝動に駆られました。故に予備校には一切通わず、言い訳のできない独学で東大を目指すことを決意します。そしてまたまた問題となったのは、家で私のためだけに部屋を借りた。家で勉強をしても集中できず、時間も保てず、すぐにベッドに転がってしまう歴史が私にはありました。さすがの私も宅浪はマズいと感じ、どこか自習室だけでも貸して下さる場所は無いかとネットで検索。すぐに Eukaré まちた を知り、私の広しき席に惹かれて自習室を Eukaré まちた に決定、私の二浪は始まりました。とまあ大体こんな感じでした。そしてその結果として、この度ずと夢だった東京大学に無事合格することができました。

しかし、もちろんその道のりは平坦なものでは決してなく、波乱万丈な二浪を自習室で一人過ごしました。まず自習室利用一日目にして、大事件が起きました。なんと一浪の後期試験で受けた北海道大学から補欠合格の連絡が私のケータイにきたのです。私はこの日、自習室で初日ということもあり勉強に燃然としていたため、ケータイの電源を切っており、その連絡に気付いたのは午後三時過ぎでした。そしてすぐに入学の意思があるかどうかを一時間以内に決めることを余儀なくされました。私の両親は仕事で連絡も付かず、私は誰にも相談することができなまま一人自習室で頭を悩ました。二浪一日から何でこんな連絡が今更に来たのと運命の神様を呪いました。自分の人生を決める時間が残り少ないのも事実。私は茫然としたまま、今日からやると机の上に積み重ねた参考書の山を眺めました。そしてこの時私の中に湧き上がってきたのは、自分の可能性とただ一度きりの人生の意味でした。ここで妥協しては一生後悔する。ただ一度きりの人生を望むように生きたい、そう強く思いました。牛車に空にか勝算があったり、私には才能があることを信じていたわけではありません。ただ単純に目の前に用意された自習室という現実を見て、このままじゃ終われないという思いから、北海道大学への入学を断念しました。

そこから後悔と自分への怒りを胸に自習室で勉強に打ち込みました。自分の中で、全てを捨てて勉強しているつもりでした。しかし、そんな決意が空虚のように思えることが大月の中旬に起きます。それまでの完全燃焼が燃え尽きたのが、突然勉強をパタリとやめてしまったのです。理由は本当にくだらなくて情けないものです。なんとここに来て、それまで見向きもなかったソーシャルゲームにハマりしてしまっていたのです。そこから私の生活は最悪の一歩でした。遂には自習室にも行かなくなり、それから夏に三ヶ月間、夏期講習や模試以外の勉強は皆無となりました。また家でベッドでソシャゲを遊ぶ日々です。もはやこの姿は受験生とはなく、ただの引きこもりニートの姿でした。北海道大学を断念した時の決意や情熱、悔しさを全てが霧散して、時間だけがむなしく過ぎていきました。

# 利用体験記

名前(PN可) M. Y.

しかしそんなニートだった私も、九月の中旬になるとさすがに人生の糸轆を感じます。このままでは本当に人生が終わると思った私は、持っているワイヤレスのiPodを屋上にぶち込んで封印し、やうと受験生に復帰しました。そして自分の情けなさに直面し、後悔ながらその眼も欠けらぬ猛烈な勢いで勉強を再開します。胸に来るのはただ一つ、糸轆りたくない、それだけでした。

その勢いのまま直前某月に突入しますが、センター試験は上々の出来で乗り切るも、受けた私大は語学専攻当日に不合格を確信するほどの出来はなし(実際、受けた私大は全て不合格でした)。さらに二月の初旬に受けた東大プレテストは色色望めたい点数(合格点に60点も届かないような点数)でした。

完全に血の気が冷めた私は、一日十五時間以上、誇張抜きで死ぬ気で勉強しました。自分の限界を超えようとして、生半端な本気で何かに取り組みました。自分に何か可能性があったら、ここで全てがわかるはずだ。そんな叫びのような思いを抱きながら、東大二次試験本番を迎え、そして終わりました。合格発表の日、私は泣きながら三年越しの合格を口齒み締めました。

自習室は良くも悪くも、自由なところです。勉強しないからといって言葉が答えてくれない言いで、言葉が勉強スケジュールを管理してくれるわけでもありません。勉強するかどうかを決めるのも自分、苦しくても前に進んでいくかを決めるのも自分。ここには全ての選択が自分の手に委ねられています。

しかし、それはよく考えてみれば、至極当たり前のことなのです。どうしても私たちは周りに流されて、自分の人生に対する決断をなかなかしにしがちです。それは他人に管理されることを私たちが心のどこかで望んでいたりするかもしれない。そしてそのせいで、日々の日常生活の中で自分の弱さと相対することも、何かの本気になることも、ないのかもしれない。全ての責任と決断を自分で引き受け、高い目標を見据えて努力がする時、初めて人は本気になるのだと思います。

そういう意味では、大学受験に限らず自習室という場所はまさに習得するのに、本気になるのには、ついでな場所だとも思います。人生で本気になる機会、そういう場所は、ほとんどの人が平凡な日常の中で、自分の潜在性を引き出すべく、本気になることを望んでいたりと思います。そして同時にほとんどの人が、自分が本気になることを心のどこかで恐れていると思います。なぜなら本気になる、それは、自分の限界、底が見えてしまうからです。本気になるのも目標の手が届かないこと、失敗することが怖いからです。しかし人間、いつかは本気になるしかない時が必ずきます。大学受験などとはまさにそうです。そんな時、心から高い目標を叶えたいと思うならば、本気になることをためらっている暇はありません。その志を抱いたまま努力する覚悟があれば、必ず自習室という場所はその機会に恵んでくれます。

最後になりましたが、大学受験、特に浪人は自分との戦いです。とだけ自分弱くて、それを受け入れて前へ進み続けるしかないのです。特に自習室での受験勉強は予備校の和気あいあいとした雰囲気とは異なり、終始自分との一対一の戦いとなります。しかしだからこそ周りの雰囲気は流されることなく、自分のペースで本気になることができ、そして本気で勉強することができる空間かと人々時々もここに相対するというのも、言いたくない寂しい感があります。私が何度挫折しようとした時でも、自習室は何も言わずに常にここにありました。だから私は決してあきらめることなく、栄冠を勝ち取ることができたのかもしれない。自分の可能性を信じて強い意思で何かを志す人にと、自習室という空間は自分と正面から向き合う貴重な体験の場となると思います。